



Title	詩人たちの二十世紀—モダニズムからポストモダニズムへ
Author(s)	白川, 計子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57881
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【62】

氏名	しろ かわ がす こ 白 川 計 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 24074 号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	詩人たちの二十世紀—モダニズムからポストモダニズムへ
論文審査委員	(主査) 教授 玉井 暲 (副査) 教授 服部 典之 教授 石割 隆喜

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、イギリス現代詩を代表する3人の詩人、モダニストのT. S. エリオット（1888—1965）、アンチ・モダニストのフィリップ・ラーキン（1922—85）、ポストモダニストのポール・マルドゥーン（1951—）を取り上げ、詩人の詩的創造の源泉が20世紀現代における世界観および人間観に対する意識と深く関わっていることを、各詩人の代表作を読解することを通して解き明かした研究である。本論文は、序、第1部3章、第2部4章、第3部2章からなる計9章、注とから構成されており、総頁A4判で165頁、400字詰め原稿用紙に換算して約500枚からなる論文である。

論者は、序章において、3人の詩人が、二十世紀の初期・中期・後期という大きな歴史的段階のなかで、現代文化・文明が孕む深刻な危機的状況の諸相に対していかに対峙したかを簡潔にまとめ、モダニズム、アンチ・モダニズム、ポストモダニズムの各詩学の特徴をスケッチしつつ、詩作品の具体的分析に際しての基本的姿勢を明らかにする。

第1部では、モダニズムの詩人 T. S. エリオットを取り上げ、同詩人が世界の断片化を意識するなかで、リアリズム文学に抵抗しつつ、普遍的な「大きな物語」の存在を前提にして実験的な詩的創造を模索した活動を、論者は『荒地』を中心とするいくつかの代表

的詩作品の分析・考察を通して追跡する。その第1章「エリオットの部屋」は、閉ざされた室内という空間をエリオットの象徴的意匠の重要な源泉と位置づけ、「ナイチンゲールに囲まれたスウィニィ」、およびその他の詩を分析する。第2章『『荒地』の空間構造』は、詩人が虚無の病を中心主題にすえ、この精神的危機のなかで魂の救済と再生を希求し、普遍的真理の探求をめざそうとした声を詩的空間のなかに探る。第3章「エリオットの小品」は、「戦争詩についての覚書」を含む詩3篇を取り上げ、詩人の個人的側面からその内面に迫る。

第2部では、第2次世界大戦後に登場したアンチ・モダニズムの詩人フィリップ・ラーキンを取り上げ、同詩人が、神話や人類の運命を視野に入れた詩を目標とせず、大衆文化の社会的基盤にもとづいて、詩人自身の体験する卑近な日常風景のなかから詩的モチーフを選別して詩的世界を構築しようとした活動の意味を考察する。その第1章は、ラーキンの同時代人である詩人トム・ガン（1929—）を取り上げ、ラーキンとの間で共有する世界観を探る。第2章「ラーキン—アンチ・ヒロイズムの詩人」は、「ブリーニィ氏」を含む数篇の代表作を対象にして、卑近な日常生活がいかに詩的世界を形作っているかを分析し、この詩的特質と詩人の深刻な関心事である現代社会のペシミズムとがいかに深く関わっているかを解き明かす。第3章「ラーキンの太陽イメージ」は具象的なものが象徴的特性を獲得する過程を跡付け、詩人の詩的ヴィジョンを探る。第4章「此岸から彼岸へ」は、ラーキンが虚無の浸透する現代社会の「此岸」から垣間見る「彼岸」の所在を詩的世界のなかに検証しようと努める。

第3部では、ポストモダニズムの代表的詩人ポール・マルドゥーンを取り上げ、主体の希薄化、言語の無力化、論理の不安定性と格闘するなかで詩作を続けることを条件付けられた詩人としての活動を追跡する。その第1章「マルドゥーン—エレジーに見るポストモダン」は、長編詩「インカンタータ」を取り上げ、詩の言葉における物質性、音声的連想力、両義的暗示性、語彙の多様性などを駆使して詩人特有の情感の表出に成功した、ポストモダンのエレジーとしての詩的技法を分析・考察する。

この第2章「都市の身体表象」は、エリオット、ラーキン、マルドゥーンの捉える都市表象を取り上げ、これらの3詩人との比較検討を通して、モダニズム、アンチ・モダニズム、ポストモダニズムの特徴を解き明かそうとする。本章は、本論文の結論ともなっていて、20世紀現代という時代に対する意識がこれらのイギリス現代詩人の詩学と深く関わっていることを重ねて述べて、本論を締めくくっている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、イギリス現代詩を代表する詩人として T. S. エリオット、フィリップ・ラーキン、ポール・マルドゥーンの3人を取り上げ、それぞれの詩人が生み出した詩作品の具体的読解を通して各詩人の詩的空間の特徴を解明するとともに、20世紀英詩の世界をモダニズム、アンチ・モダニズム、ポストモダニズムという3つの詩的立場から巨視的に考察する視角を提示した意欲的な研究である。本研究により、20世紀現代の文化的・文明的状況における世界観ないしは人間観に対する詩人たちの意識が詩的空間を造り上げる創造的源泉に深く関わっているという共通の問題意識のありようを明らかにすることがで

き、さらに、詩人たちが固有の詩学の確立に向けて模索する詩的創造の現状ないしは原風景を多面的に浮き彫りにすることに成功したのは、イギリス現代詩研究にとって大きな貢献である。特に、フィリップ・ラーキンの詩的特質として従来指摘されてきた、日常風景の描出と「世界」ないしは「生」に対する冷徹なまなざしとの関わりを、「ブリーニィ氏」のみならず、「昼下がりに」「生きること」「トランプ遊びの男達」などの詩作品の卑俗性を帯びた側面を綿密に検討することを通して、詩人の内面の奥底に横たわる純粹で孤高な生のすがたを捉えようとした論考は注目に値する。アンチ・モダニズムのもつ意味の再考や、卑近な日常生活のもつ表層と深層の両面に執拗な文学的関心を示す現代英文学の特徴のなかの一面への考究を促す洞察にみちた論考と言えよう。また、ポール・マルドゥーンに窺えるポストモダニズム的詩法の考察は日本の英文学研究界にとって先駆的な研究として高く評価できよう。

ただし、本論文において疑問点がないわけではない。3つの詩的立場の相互関係について、詩的技法と詩的ヴィジョンの両面からより一層詳しい説明が求められよう。議論に繰り返しがいくらか見られるのも惜まれる。

しかし、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してなく、よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。